

## 第2回 くまもと未来会議議事録

と き 平成21年1月24日(土) 13:00~15:00  
ところ 熊本テルサ(たい樹)  
内 容 熊本の可能性について、フリートーク  
出席者 小栗宏夫 委員(熊本経済同友会 代表幹事)  
姜 尚中 委員(東京大学大学院情報学環 教授)  
斉藤 惇 委員(株式会社東京証券取引所グループ 取締役兼代表執行役社長)  
崎元達郎 委員(熊本大学 学長)  
橋田紘一 委員(株式会社九電工 代表取締役社長)  
松島正之 委員(クレディ・スイス証券株式会社 会長)  
蒲島郁夫 知事

### 【内田企画課長】

それでは、定刻になりましたので、ただ今より「第2回くまもと未来会議」を開催いたします。私は、事務局の熊本県総合政策局企画課長の内田でございます。どうぞよろしくお願いいたします。それでは、開会にあたり、蒲島知事から一言ごあいさつを申し上げます。

### 【蒲島知事】

皆さん、こんにちは。

今日、第2回目の「くまもと未来会議」を開催します。未来会議の委員の皆様のご多くは遠方からいらっしゃっておりますので、それに関して感謝申し上げたいと思います。

私の知事就任から9ヶ月が経ちました。知事就任から私が唱えてきたことは、三つの困難「川辺川問題」「水俣病問題」「財政再建」、そして、これを越えて4つの夢に向かって動こうということです。1番目の夢は「稼げる県くまもと」にすること。2番目の夢は「夢のある教育」を行うこと。3番目の夢は「品格あるくまもと」をつくること。そして4番目の夢は「長寿を恐れない社会」をつくること。そういうかたちで、これまで9ヶ月間一生懸命にやって参りました。

私が知事に就任した時には逆境でしたけれども、その後、去年の暮れから大逆境になりました。この大逆境の中でどのように「くまもとの夢」を進めて行くかということ、価値観の転換を含めながら考えていかなければいけないと思っています。そこで、この未来会議の皆様、将来の熊本はどうあるべきかということ、枠組みを越えて、あるいは価値の転換を含めながらお話して頂ければ大変嬉しいと思います。

先程、この未来会議が始まる前に、小学3年生の宮田史香さんが既に4つの提言を書いて持ってきて下さいました。「熊本の歴史や問題について詳しく学ぶチャンスがないので、工場見学等の時に県庁見学を取り入れるべき」とか、2番目は「熊本城におもしろ体験ゾーンを作る。例えば、なりきりガラシャ夫人や清正公写真館、からくり屋敷芝居小屋など、おばけの金太郎作り、おばけの長屋などを作る」。それから3番目に「ロアッソのホームゲームを小学校ごとにみんなで観戦する」。4番目に「アメリカの大統領選のように熊本のみなが心を一つにして頑張るべきです」というものでした。小学校3年生の方でも、熊本の未来をこのように語っていらっしゃいます。

今日は、この未来会議の委員の皆様には、それを大きく越える提言をお願いしたいと思います。(会場笑い)では、よろしくお願いいたします。

### 【内田企画課長】

ありがとうございました。

それではこれより、議長が議事と進行を行います。蒲島知事、よろしくお願いします。

### 【蒲島知事】

それでは今から、私が会議の運営を行いたいと思います。

今日は残念ながら二人のメンバーの方がご欠席です。JR九州相談役の田中浩二委員と、昭和女子大学学長の坂東眞理子委員です。「出席できないのが大変残念です」というメッセージが届いております。残りの委員の方は全員揃われています。

早速、議事に入りたいと思います。この会議は自由な意見交換の場と考えておりますので、どうぞ皆様リラックスしてご発言を頂ければと思います。

本日の会には前回に引き続き、「くまもとの可能性」についてフリートークでお願いしたいと思います。熊本には優れた人材や、古来より受け継がれた歴史文化をはじめ、阿蘇・天草など世界に誇れる自然や景観、大地の恵みであり宝である農林水産物など豊かな資源や財産があります。そして私たち県民にとってごく身近なものであっても、見方を変えると新たな価値が見いだせるものもあります。県民の総幸福量が増大するためにどのような可能性があるか、こういった視点でまず自由にご意見を頂戴いたしたいと思います。

まず、前回欠席された委員の方からお願いしたいと思います。姜さんどうでしょうか？

### 【姜委員】

突然振られて戸惑っておりますが。(会場笑い)

このメンバーを見ると今日は坂東さんがいらっしゃらないので、女性が少ないというか…。

最初、(未来会議の委員にと)言われた時には、私は熊本を出た「放蕩息子」のようなものですし、親もいなくなって、親が一番好きなふるさとだったので、「家出息子」として少しでも故郷のために尽くすべきだと考え、最近では熊本にちょくちょく来るようになりました。

それで東京にいと、どうしても熊本の悪口を言われるとやっぱりムカムカしてきます。(会場笑い)しかし、外側から見ていると良い面も悪い面も含めているんなものが見えてきますね。

先ほど知事の方から「逆境」ということでご発言がありました。今、雇用の問題、失業の問題、緊急にやらなければならないテーマももちろんあるわけですけど、今日は「可能性」ということで少しお話をしたいと思います。

問題は、「くまもとの未来」を考える時に、同時に世界はどうなっているのか、ということについて、しっかりとしたトレンドを読んでおかなければいけないと思いますね。

グローバル化というのは、私たちのささやかな生活と世界で起きていることがダイレクトに結びついてしまって、いわば自分たちの足下をどうするかということが、世界の大きなトレンドによって翻弄されるような状況です。そういう時代の中で、翻弄される力の中で、どうやって熊本が「抗う」か。きちんと自分で泳いでいける力を身につけなければならないんじゃないかな、と思います。

今までのように、大きな旅客船に乗りたいたか、あるいはボートに乗りたいたか、救命ボートがあれば助かるな、ということではなくて、自分で泳がざるを得ない。恐らくそういう時代が来たのではないかと思うのです。

私はそれを「自由の逆説」と言っているんですけども、自由であることが逆に非常にしんどい。しんどいけれども可能性があると。

じゃあ世界はどうなるのだろうかということなのですが、ここではいろいろな方がたぶん私よりもっと詳しくいらっしやいますので、私の雑ばくな知識から言いますと、学生時代、1968年だったでしょうか、イタリアでオリベッティ社の副社長（アウレリオ・ベッチェイ博士）が「ローマクラブ」(The Club of Roma：天然資源の枯渇、環境汚染、人口増加などの諸問題を研究、提言した国際的民間組織。各国の知識人や財界人によって構成。)を作りました。今、「ダボス会議」というのがありますけれども、それから70年代にオイルショックがあって、そして変動相場制に世界が移っていくその前後に『成長の限界』という報告書が出された訳です。これは、今もう一回見直してみると、今の全体の流れを的確に予言していたと思います。つまり、化石燃料のようなものがピークアウトして、アメリカ型の大量消費・大量生産というのがもう限界なんだと、どうしたらいいかということ、いくつかの変数を通じて、しっかりと我々に初めて示している。

あの時代だったと思うのです。我々はエコロジーということをよくやっていたのです。それで、経済学者の玉野井（芳郎）さんも「環境経済学」ということを主張していましたが、結局オイルショックを乗り切って、円高も乗り切って、アメリカも方向転換できずに、やはり成長路線ということが身についてしまったと思うんです。

結局、今回のアメリカの金融破綻というのは、やはり私は変動相場制が始まったあの時代からすると、約40年近くのタイムラグがあったけれども、今やっと70年代初期の問題に戻ったと。

そう考えていくと、開発主義とか発展主義とか成長主義とかという考え方を変えなければならぬ。方程式を変えるということですね。相も変わらず、金利安、円安を誘導させて、外需依存型で儲かるんだということやってきた訳ですけども、これはもう成り立たなくなってきたということです。

じゃあどうしたらいいかと考えた時に、70年代に一番問題提起されたのは、やはり第一次産業でした。つまり自然との共生とか、あの時代に我々はイリイチの脱学校社会論とか、ポラニーなどの環境経済学などの本を読みました。その時から30年余り、今やっと、第一次産業という大地と繋がった物を育てていく、そういうものが実は最も重要な、世界的にも最も重要なものになってきているのではないかなと思うのです。

考えてみると、日本の成長主義はかなり第一次産業を犠牲にしてきましたし、熊本県は基本的にはやはり、蒲島知事がもともと農協におられたということもあって、農業を基礎に据えているところだと思います。

したがって、私は農業をどうやって復活させるか、農業を多機能的なものにして、生態系や地域や色々なところと調和をした観光や教育など、多機能にまたがる農業のあり方を、根本的に考え直さなければいけないと思っています。これが、私が一番言いたいことです。

2番目は、やはりアジアとの繋がりです。私の出自からしても、九州はある意味では東アジアの一角にありますし、私は前から「東アジアコモンハウス」と言ってきたんですけども、なかなか色々な事情があって難しい。しかし、オバマが出てきてアメリカの再建が可能であるとしても、たぶんアメリカは普通の大国になっていくのではないかと。超大国ではなく。そうすればおのずから東アジアに求心力が働きます。

今は経済的苦境にあるわけですけども、やはり九州というロケーションや熊本の位置を考えると、東アジアと結びついていかざるを得ないと思う。去年だけで九州に90万人か100万人くらいのお客さんが来ていらっしやって、日本人観光客は4,000万人から5,000万人くらいでしょうか。圧倒的に数が少ない。数が少ないんですけども、この間人吉・球磨地方に行った時に、ほんとにおいしい焼酎をイタリアに輸出しようと言われてたんですね。それだったら韓国に輸出してくださいと。今、韓国は空前の日本酒ブームなのです。しかし、ウォンが二分の一になりましたから、酒を飲む

ということはかなり高価なワインと同じになってしまっているのです、もう少し安くて、とてもおいしいものがいっぱい作れる。そういう意味では、観光客を呼ぶということは、市場を開拓するうえでパイロット的な役割を果たすことになるので、ツーリストの実数として少ないということではなくて、もう一回やっぱり市場を開拓していくという意味で私は重要なのではないかなと。

その意味で、熊本には英語、ハングル、中国語の案内板、掲示板、それからそれをきちんと話して案内ができるステーション、こういうものをもっともっと作るべきではないかと思います。

最後に、熊本は決して閉ざされた地域ではなくて、外に人を送り出していましたし、また外から人が来ていましたし、そういう歴史をもう一回きっちり若い世代に教えるような、そういう教育をしていただきたいと思います。

この3つがかみ合えば、私は熊本ほど潜在的能力がある県も珍しいと思いますので、なんとか私は中長期的には、かなり熊本というのが頑張っていけるのではないかというふうに考えています。

ちょっと短いですが、冒頭ですので恐れ入ります。

#### 【蒲島知事】

ありがとうございました。それでは松島さん、すみません自己紹介の方からお願いできますか。

#### 【松島委員】

松島と申します。

私は熊本生まれではございませんけれども、90年から92年まで当地で勤務をしておりました。それ以来、熊本を第二の故郷という風に思っておりまして、非常に熊本に対して熱い思いを持っております。熊本という言葉聞くだけで血が騒ぐような感じでございます。

今日は、大きなマクロからの話をせよ、ということでございますけれども、私の視点はどちらかといいますと、2年間過ごした生活者、あるいはユーザー、あるいは観光客の目線から話を申し上げたいと思います。

それからもう一つは海外での生活、あるいは出張等で70カ国近くも海外に行っておりますので、グローバルな視点から何かお話することがあればいいなと思っております。

姜先生がおっしゃいましたように、今、世界経済は危機であります。日本も大変な状況に置かれているということで地方経済も大変な状況がまだ続くのだらうと思っております。ただでさえ高齢化とか過疎化というようなことで地方経済の地盤沈下と言われていたなかで、一方で中央にいろいろと従来のように補助金を出せ、公共事業をやれ、という話をしましても、中央の方も「ない袖は触れない」ということになってきているので、そういう意味では苦しいけれども自立の道を何処で見いだしていくか、地方自身の問題として何処に自立していく道を探していくか、という努力を懸命に行っていかなければならないのではないかなと思います。

私は、2週間ほど前、熊本日日新聞のインタビューで、「農業と観光で熊本の風を起こせ」ということを申し上げました。ということで、このお話は先ほどの姜さんのお話とまったく同じ主張になるかというふうに思いますが、なぜ私が「農業と観光」を一体として申し上げてるかということで、説明させていただきたいと思います。

「農業と観光」にはシナジー（synergy：相乗作用）があるということでありまして。「農業と観光」にシナジーということになりますと、通常、例えば観光農園であるとか、あるいは一時的に農作業に参加するというようなことが言われているわけでありまして。しかし、私の考えるところでは、農業と観光との関係というのは、もっと大きいところで非常に深いところにつながりがあるのではないかなと思っています。

昨日、熊本に来る前に、駐日のスイス大使とお話をする機会がありましたが、「松島さん。日本ではどうして観光は『観光ツーリズム』ということだけで考えるのですか。スイスでは、観光ということを考える時には広い意味での農業ということと常に一体で考えています。」というお話でした。農業といっても酪農を含めての広い意味での農業だろうと思います。

農業というものをそういう面で考えてみますと、農産物をつくるという意味で、経済活動に貢献しているということもごさいます。しかし、農業の役割はそれだけではなくて、日本の国土を保全し、そして荒々しい自然を、日々の労働で手入れの行き届いたような美しい自然を作り上げているわけであります。そういう大きな美しい手入れの行き届いた自然が、観光のバックグラウンドになっているということだろうと思います。そういう点でスイスのことを考えてみますと、皆様、ポストカード等で、スイスのアルプスを背にして牧草地があり、そして農家自体が景観として一つのシンボルとなっているという意味で、トータルとしての観光に大いに寄与しているということがあると思います。

それから、最近のような、いかに人生を生きるかという、働くだけではなく生活とのバランスをとる「ワーク・ライフ・バランス」というようなことが、これから大きなテーマになってくると思いますが、そういう意味では、日々の仕事から解放されて、ストレスから解放されて、大自然の中に身を置くというのは、人々に働く力を与えるという意味でも人々の経済活動にプラスの貢献をしているのではないかと思います。

経済学もいろいろございますが、最近の文化経済学というジャンルで見ますと、文化・歴史・自然が無いと、人々の営みにもゆがみが生じるということで、持続的な成長ができないと言われております。そういう意味では、冒頭申し上げましたように、「観光と農業」は一体として大きく捉えていく、そうすればするほど、全体として付加価値がさらに上がってくるのではないかと思います。

熊本にもあると思いますが、例えば美しく耕された棚田ですね。この棚田だけを見るために全国からカメラマンが集まってくる。見に来る。田自体が観光資源になっているという面もございます。

それから、ロンドンに住むイギリス人は、週末はカントリーサイドの家を借りて、自然の中に身を置いて週末を過ごす。これが最も望ましい生き方と言われております。

そういう意味では、繰り返しますけれども、「農業と観光」を別物としてそれぞれ切り離して考えるのではなく、トータルに考えていくことが必要であると申し上げておきたいと思っております。

それでは、この後も発言の機会があると思っておりますので、「観光と農業」について、どういうスタンスで臨めばいいかということについては、後ほどお話ししたいと思っております。

#### 【蒲島知事】

どうもありがとうございました。それでは、小栗さんお願いします。

#### 【小栗委員】

熊本経済同友会代表幹事の小栗でございます。

前回の会議につきましては所用がございましたので、書面で私の意見を提出させていただき、大変失礼いたしました。

前回、「外から見た熊本のイメージ、私が思う熊本の可能性」という議題で、皆様方がご意見をお出しになって、その議事録を読ませていただきました。私も熊本に来てもう10年が過ぎましたので、どちらかというと熊本経済を基準にして物事を考え、また、ある面では熊本を非常に愛しておりますので身びいきな面があるものですから、今回こういう形で熊本を客観的に見ていただいて、いろいろなお話を聞かせていただけるということで、今回の会合は大変楽しみにしております。

私としては、経済的な面から熊本の未来についてお話しさせていただきたいと思いますが、先ほど少し申し上げましたように、まず、皆様のお話をよく聞かせていただいてから、自分の考えを述べさせていただきたいと思います。

私は、熊本はポテンシャルが高い、発展性がものすごくあると思っています。また、逆に切望している身でございますので、その辺も含めてまた後ほど、その観点からお話させていただきたいと思います。

#### 【蒲島知事】

それでは、後は、まだ発言されていない斉藤さんの方からお願いします。

#### 【斉藤委員】

今、姜先生や松島先生や小栗先生からお話があったことからあまり離れた考えは持っていません。知事への何らかの提言やアドバイスをすることで集まっているわけですが、知事の支持率が80%以上ということですから、我々が言うことはないんじゃないかと思っております。

既に皆さんご存じの通り、世界中が今クライシス（危機）に入っています。この構造は、アメリカのGDPが1,400兆円ぐらいあるわけですが、その70%、1,000兆円ちょっと切ったぐらいの消費構造、これで実は過去10年か20年、世界が栄えました。ですから、日本の失われた10年というのは、一応復活したと言われますけれども、実は、アメリカの1,000兆円という、およそ病的な消費で日本の経済も救われたと言えば救われた。中国やインドの成長も、実はこれ無しでは、できていないということであります。皆さんと一緒にやった九州産業交通の再生ですとか、三井鉱山の再生は皆さんとここでやりましたけれども、これが買い手に売れたという背景にも、実はそういう構造の先に買い手があったということであります。

しかし、その1,000兆円の消費の財源、ファイナンスのやり方を開いてみたら、実はかなり危ないというか、およそ常軌を逸したようなファイナンス方式でこの消費を持たせていたというわけです。

これは、考え方が悪いというふうに報じられていますけれども、実は、ブッシュは「家を持たない人に持たせてあげよう」という政策を必死で考えたんですね。知事も姜先生もアメリカ生活が長いと思いますが、アメリカ人のアメリカンドリームが現実化するの、ハウジング（住宅）なんです。緑の芝と大きな家。これがアメリカに行った人の夢でありまして、およそ60%近くの人が自宅を持っているわけですが、ブッシュはもう少し貧しい人にも家を持たせようとした。そこまでの発想は良かったと思いますが、そういう下命をしまして、その政策がホームエクイティローン（home equity loan：不動産を担保として低利のローンを比較的容易に借りることが出来るシステム）という、住宅をエクイティ化して借金を返していくということをやったわけです。ここにいろんなまざいことが仕組みられて、今回の事件になりました。

今回の事件は、簡単にリカバリー（回復）しません。おそらく1,000兆円の消費は700～800兆円の間くらいまでに縮小する。つまり200兆円くらい縮小しないと、まともな状況にはなりません。この問題はアメリカだけではなく、ヨーロッパがもっとひどい。今から出てくると思いますが。

200兆円がどのくらいかと申し上げますと、日本のGDPが500兆円ですから、日本のGDPの半分くらいが一気に縮小するということです。仮に、何年かかけてそこまで戻ったとして、再び1,000兆円の消費に戻るかというと、戻るときはあると思いますが、そう簡単ではない。

そうすると、イギリスで始まった産業革命以来、アメリカ、日本など、ものづくりをする供給体が出たわけですが、ここにきて中国、インド、東ヨーロッパ、あるいは南米も物をつくれるように

なってきましたので、世界中、過剰供給状態になっているわけです。悪い冗談を言うと関係者がおられたら怒られますが、「この自動車 10 年持ちますよ」とセールスの方に売られたが、2 年後には「買い換えませんか」と言われてこられた、ということです。

こういうハードセールス構造で今まで資本主義は成り立ってきたのですが、やはり、職が無くなるかもしれない、所得が伸びないかもしれないとなると、「10 年持つ車なら 10 年持つてみようか」と思い出した途端に、今までつくってきた車は 10 分の 1 で済むということになります。トヨタ自動車さんで 800 万 ~ 1000 万台。GM でだいたい 1,100 万台ぐらい、今度は 770 万台ということになりましたけれども、おおよそ世界で 4,000 万台近くつくっているわけですが、こんなには要らなくなる。

そうしますと、どこかで生産をある程度落とすと同時に、アメリカに替わって新しい需要をつくらなければならない。その一番資格があるのが日本だと思います。それはなぜかということ、1 兆ドルという外貨準備を持ち、1,500 兆円という家計勘定、皆さんの貯金で 1,500 兆円という現金を持つ国民は、1 億人ちょっとの人口では世界に類がないのです。

これは実は皮肉なことに、我々は良いことと思って貯蓄をしたのですが、この貯蓄は回り回ってアメリカに流れていたわけです。外貨準備だとか、投資だとかでアメリカに流れまして、先ほど申し上げた 1,000 兆円のファイナンスの後ろには日本の金があったのです。つまり、日本人は一生懸命働いて、自動車をつくったり、カラーテレビをつくったり、いろんな物をつくって稼いだお金をアメリカに送って、アメリカ人はそのお金で家を買って楽しんでレジャーに行ったりいろいろやっていた。これが今までの構造です。

今、アメリカは、日本やアジアの過剰貯蓄を批判しております。「そのおかげで我々は大変なことになった」と言って、彼らは逆に我々を批判しておりますけれども、我々は今からアジア、日本に内需をつくらないと世界は救われない。ヨーロッパはアメリカよりもっと悪いですから、ヨーロッパに内需をすぐに回復させようとするのは無理です。内需ができるのは第一に日本です。次は中国で、いずれインドだと思います。

そうすると熊本は何をするかということに降りてくるんですけど、「内需的なものに参加する、内需創造に参加する」ことが熊本が一番伸びるデザインだと思います。

国民、あるいは世界の民は何を求めているのだろう。特に日本の国民が自動車を求めていますか、カラーテレビを求めていますか、医療を求めていますか、きれいな水を求めていますか、空気を求めていますか、というときに、東京では「自動車のライセンスも要りません、私は自動車を買いません」という若者がどんどん増えていまして、なんと、自動車講習所が破産に陥っているという現象まで起きているわけです。歴然たる現象が日本に起き始めています。

つまり、物（ブツ）というよりも、もう少し精神的、あるいは安全とかですね。老後の介護ですとか、そういうものに非常な価値観を持ち始めております。そうすると、熊本はむしろ、そういうものを用意した方が、ちょっとした 5 年あるいは 7 年後のことを考えると、何をやって熊本県の GDP を上げていくかといった時の政策が出てくるように思います。

一つだけ最後に申し上げますと、第 1 回の会議でも申し上げましたけれども、農業も勿論ですが、医療を考えます。シンガポールや韓国の済州島と仁川に、ものすごく大きい医療センターができています。韓国は途中ですが、シンガポールは完全にできあがっておりまして、世界のお医者さんがそこに来ると所得税を半分にするという優遇策をとっているために、日本やヨーロッパやイスラエルの医者が集まっております。超一流レベルの医療がそこにある。シンガポールの若者もそこで学べますし、中東の王様のような裕福な人たちが 2 ~ 3 か月間そこにステイして治療するという施設が出来ております。これが、シンガポールの GDP をサポートしている一つの例示です。私は、熊本にこういうものをみんなで作り上げていくということが一つの秘策としてあるのではないかと思います。

ます。

【蒲島知事】

それでは、崎元さんどうでしょうか。

【崎元委員】

熊本大学の崎元でございます。

医療の話をお齊藤委員がなさったので、前回も少し受け答えをしたのですが、熊本大学の医学部というのは、私の口から申し上げるのは何ですが、かなり優秀な方だと思っておりますし、文部科学省のグローバル COE プログラム（国際的に卓越した教育研究拠点の形成を重点的に支援し、国際競争力のある大学づくりを推進することを目的とした事業）で、感染症やエイズ、発生医学などにおいて億単位の支援を受けておりますので、すぐにといいことではありませんが、医療を中心とした政策には十分御協力、対応出来るのではないかと思います。時間はかかると思いますが、少し前に、重粒子で癌を治療するという国のパイロット事業がありました。これは 100 億円以上のプロジェクトだったのですが、熊本にという話があったのですが、文部科学省の政策では群馬に行ってしまいました。これが実用段階に入りますと、熊本も手を挙げて誘致するというのが一つのやり方として可能だと思っています。

私の方からは、やはり教育の立場で、熊本が教育県であるということ。やはり肥後細川の伝統で、例えば医学部にしましても、「肥後医育」という形で数百年の伝統をもっているということでありますので、教育ということをお願いしたいと思います。

県内の大学生数というのは、10 万人あたり 0.54 という数字があるのですが、全国中位 21 位くらいです。ただ、県内の高校の卒業生が県内の大学に入る割合というのは、非常に高く 5 割弱。良いか悪いかは別として、地域に定着しているということに関しては、全国 9 位くらい。ところが、大学生の出入りを見ますと県内から 6 割、県外から 4 割の人が熊本に来ていただいておりますが、卒業後就職等で、半分が県外に出て行ってしまいます。

申し上げたいことは、やはり若者が熊本に集まるという効果。これはかなりのエネルギーになります。私は工学系ですので、すぐに具体的なことになるのですが、今、熊本県内に 11 大学、2 高専がありますが、その授業料だけでも 260 億円ありますし、生活費を入れるとかなりの経済効果があります。

そのことと、前回も申し上げましたが、新幹線が全線開通して、縦に fast な軸ができますと、いろんなことが起こり得ますが、少なくとも若い人たちを熊本に留めたいということで、3 年前に「高等教育コンソーシアム熊本」というものをつくりました。県立大学、学園大学、崇城大学、熊本大学を含めて 11 大学ですね。大学が連携をして、福岡からも熊本の大学に来てもらうような意気込みで協力してやっていこうということで、3 年目を迎えております。

熊本にすぐに就職をされなくてもいいのですが、やはり熊本に残って欲しい、あるいはある時期には熊本に帰って仕事をして欲しい。そういうことが熊本の活性化に繋がると思っていますので、熊本県が進めておられる企業誘致も、知事も言っておられますが、工場だけが来ても不十分なので、少なくとも研究部門や設計部門といいますが、少し高級な部分といいますが、大学生や大学院生が卒業しても就職できるような企業誘致を実施しないといけないと、かねがね申し上げております。

それから、もう一点、活性化の一つの動きとして、先ほど姜先生からもグローバルという話が出ましたけれども、今、留学生が日本全国に 12 万人くらいいます。これは、10 年計画で 10 万人を達成するといつて、20 年かかりまして、ようやく今 12 万人おりますけれども、今の前の福田首相が、

留学生 30 万人計画というのを言い出されました。現在、そういった国の動きがあり、2020 年まで、あと 10 年後ぐらいに 30 万人という計画を持っているわけです。

今、県内に 800 人ぐらいの留学生がおられます。熊本大学には 300 人ぐらいいます。そうすると約 3 倍とすると、熊本大学には 1,000 人近く、県内では 3,000 人近くの留学生がいることになるわけです。それで国際化を。熊本市をはじめ県内も標識などを国際化して、異文化交流の気持ちを持ちながら活性化していくというのが、これからの動きとして避けられないというような思いであります。その辺をとりあえず申し上げておきたいと思います。

#### 【蒲島知事】

それでは、最後に橋田さんの方から。それで皆さん一巡しますので、後は自由に発言ということになります。

#### 【橋田委員】

九電工の橋田です。

私は、生まれも育ちも福岡であります。約 20 年前、平成 3 年から 5 年にかけて九州電力の熊本支店に勤務したことがあります。また、蒲島知事とは 10 年近くに亘りご親交いただいております。そういった関係で、委員に選抜いただいたのかなと思っております。

熊本の将来性といいますか、こういう風になって欲しい、と常々思っておりましたことをお話したいと思います。

これまでいろいろなところに住んでまいりましたが、2 年間熊本にいて、本当に物が揃っていて、こんなにも恵まれている地域はないと感じました。すばらしい海や山があり、食べ物も美味しい。赤牛も美味しいし、温泉もある。

特に、水は最高ではないかと思えます。私が熊本にいた当時、先輩が病気をされたのですが、お見舞いに何を持って行こうかと迷いました。熊本出身の方でしたので、白川水源の水を汲んで病院まで持って行きましたところ、大変喜んでいただきました。また、東京から友人が来ると、自分で汲んできた水をおみやげに渡したくらい、本当にすばらしい水だと思えます。

水の影響だと思うのですが、例えばコーヒーもケーキも本当に美味しい。おそらく、生物の原点と申しますか、根源は水にあると思えますので、それ故に熊本の果物や野菜も美味しいのではないかと思います。

もう一つは、世界に誇れる景観。カルデラ、南阿蘇の景色、それから天草の西海岸、特に夕日が沈む瞬間、各地にある温泉など、熊本の素晴らしさは数えればきりがありません。

逆に 20 年前に不思議に思ったことは、熊本には、ブランドとして取り上げれば全国に名を成せるものもあるし、観光面では世界にもアピールできるものがあるのだけれども、今一つ知名度が高くないのはなぜだろうということです。また、自分自身 2 年間熊本に住んでお世話になっただけではなくて（熊本が）好きになっていたこともあって、早く熊本の良さが、日本、あるいは世界に知られて欲しいと思っておりました。

そこで、提言という程ではありませんが、先ほどから一次産業の話が出ていますけれども、熊本の良さとポテンシャル、強みは、やはり水と自然であると思えます。特に農業、酪農、それから水産業を振興する具体的な方法を検討して実現できれば、結果として日本の食料自給率を高めることに貢献できるのではないかと思います。

また、世界各国で食料問題が指摘されています。特に中国やモンゴルなどで安全安心な食料がないと。それから中国の内陸部においては、深刻な水の問題が出ていますので、熊本の水を中国に持

って行くとか、あるいは熊本のブランドの野菜や果物を中国で生産して、中国で販売するというような仕組みが出来ないかなと考えています。

唐突であるようですが、私は九電工でもそういうことが経営として成り立たないかと思っっています。それは単に利益がでる、儲かるということではなくて、先ほど申し上げましたように、地球環境問題や食糧問題に企業として貢献でき、事業も成り立つということが出来ないかを考えています。

具体的に言いますと、熊本の場合ですと、最近、農業をやってくれる後継者がいなくなって、休耕田が散見されます。鹿児島県もそうです。特に南九州三県は同じ問題を抱えているのではないかなと思います。そういう休耕田を誰かにしっかりまとめていただいて、それを我々が事業として活用できる道はないかと。そういうことを検討しろということであれば、我々も検討して、いわゆる一次産業経営に参入したいと思います。

その際、おそらく問題になると思われるのは、現在の農業協同組合や、酪農関係の協同組合もありまして、既存の組織団体と進出参入していく企業との間で、いろいろな摩擦、バッティングが起こるであろうということです。

したがって、キャパシティを大きくすることが重要だと思います。熊本、あるいは日本の限られた地域でのマーケットで同じような物を作ってそれを販売するとなると、双方で利害得失が出てくると思います。そこで、先に申し上げたように、例えば熊本ブランドを中国に持って行くとか、お互いに協力共生し、キャパを大きくすれば、きっと共存共栄できるのではないかと思います。そういうことは、熊本にとってもいいことではないかと思います。

これから人口が減少して、さらに一次産業の後継者がいなくなるでしょう。しかし、荒れ果てた田畑が残るより、そこに野菜を植え、稲作をすれば、地球環境問題に貢献することにもなると思います。そういう意味で、社会的に意味のあることだと思われるから、やっていくべきではないかと。そしてそのことは、熊本にプラスになるのではないかと思います。

もう一つ、例えば南阿蘇付近はすばらしい場所と思うのですが、もし叶うことなら、ああいうところの休耕田や畑を活用して、「幼老共生」の場、つまり幼い子どもたちと経験を積んだ高齢者が共生できる場所を提供するという考えをもっています。

自分の父親と母親も高齢にして直近に亡くなりましたが、その母も90歳を過ぎて、「自分は社会の役にたっていない。自分は邪魔者で、迷惑をかけるばかり」と悔やんでおりました。もともと健康だったのですが、突然目が見えなくなって、そのことを悔やんで、「役に立つことをやりたい」と言っておりました。そういう苦しんでいる姿を見た時に、これから高齢化社会を迎えるわけですので、特にどこかが悪いということではなく、いろいろなことでお手伝いできる場があれば、本人にとって生きる喜び、生き甲斐を感じられる、そのような仕組みができないかと思っっています。

先ほど申し上げたように、例えば南阿蘇に企業が場所を提供して、高齢者の方がスイカの大小を選り分けるとか、或いは、芋の選り分けをすとかという形で作業に参画してもらって、生きる喜びを感じてもらおうと。後は農園でつくった安全安心の野菜を食料とし、温泉に入る。表現はよくないですが、「PPK作戦」といってずいぶん前から考えておりました。「ピンピン生きて最後はコロリ」という、最後の最後まで健康で、あとは迷惑かけないように大往生する。父がそうでした。

そういうことをいろいろ組み合わせて事業としてもやれますし、観光農場をつくるとか、或いは養老共生の場所を提供するとか、そういうものを「何とかランド」という形で熊本県が相当大規模におやりになったとしたら、世界の観光客も来てくれるし、みんながその観光レストランや農場レストランで食事をしてくれるようになるのではないかと、夢ではありますが、そういうことができれば、と思っっています。

他にもいろいろ考えがあるのですが、前回も申し上げましたけれども、私はそれを熊本でぜひや

って欲しいと思います。それがモデルとなり、日本のビジネスモデルが出来て、それがサクセスストーリーとなればと思います。

#### 【蒲島知事】

どうもありがとうございました。これで発言が一巡しました。

ここで見てきたのが、「価値観の転換」というキーワードです。これまではマーケット、経済成長、開発主義から喜びを感じてきたという社会のあり方に対して、今回の大不況というのは答えを出してくれたのかなど。何処まで突き詰めていけばよいのかということに関して、開発主義ではない答えを求められている。そこに熊本の可能性があるというのが、全体的なトーンではなかったかと思います。

姜委員の場合は観光と農業と教育、そういったところに価値をおいたお話でありましたし、松島委員はまさに観光と農業、そして生き方の問題が投げられたと思います。小栗委員は熊本の可能性の大きさが、今、見えてきていると。そして斉藤委員は農業と医療センター、いわゆるモノから精神を求めると。そこで、どうやって熊本は内需に参加するかという問題が論じられました。崎元委員は教育県として若者を集める、若者を残すためにはどうしたらよいかというお話。そして橋田委員からは、阿蘇、天草、そして熊本の良さである一次産業の振興にむしろ企業が入って行って、JAなどとどのように共存していくのかというお話。それから生きるということはどういうことかということで、南阿蘇に可能性を求めているという話でした。

そういった意味でこれまでのディスカッションは、熊本の可能性というものが、今だからこそ爆発するというものでした。これから1時間ほどあるので、じゃあどうしたら良いのかというのを自由に皆さんのご意見をいただきたいと思います。

#### 【姜委員】

言い足りなかったことがいくつかあります。

一つは、5年ほど前からトヨタ財団というところで、地域社会プログラムを立ち上げました。一昨年、選考委員長を辞めましたが、この地域社会プログラムというのは、人権、教育、共生、自殺の問題、経済の活性化など様々な問題を抱えている地域が、どうやってひとつの横のつながりを持たせるか、それはある種の絆ですが、絆をどうやって創り出すか、ということを考えてきました。

私がそれに5年くらいつきあってきて感じたことは、日本は涙ぐましいほどに、いろいろな努力をしているということです。しかし、残念ながら国民的なレベル、政治に反映されていない。そういう閉塞感が一方でありながら、地域社会のグラスルーツ（grass roots：草の根）では、いろんなイニシアチブが出てきているのです。

東北の河北新聞で「新しい開拓」というテーマでシリーズをやっていましたが、その時に感じたことは、米（コメ）でもモノカルチャー（monoculture：一種類の作物だけを栽培すること。単作。また、特定の生産品にだけ依存する経済構造）型の米作りを大規模にやっているところが一番打撃がひどい。それに対して、先程どなたが「組み合わせる」ということをおっしゃいましたけれども、中山間地のほうがむしろ体力がある。それがどうしてなのか、現地を取材して記者がルポしたのですが、中山間地は耕地面積が少なく、米作だけでは生きられないので、いくつかの手仕事を含めて組み合わせなければならぬという状況があります。私は、農業を考えていくうえで、これがある種多機能的に今後生かして行って、若年層が豊かな可能性を持って入っていく場合でも、モノカルチャー型の農業ではなく、多機能、組み合わせていくことが大切であることが実感としてわかりました。それをまず一つ、指摘しておきたいと思います。

2番目は、2002年に経済破綻したアルゼンチンのブエノスアイレスに、その翌年、NHKのクルーと一緒に取材で2ヶ月くらい入ったのですが、ある意味では今の不況の前哨戦だったわけで、ペソとドルが1対1で固定相場制だったのが、完全に崩壊しました。昭和恐慌を知っている方は現在95歳以上なのでたぶんここにはいないと思いますが、経済学の本で、若いエコノミストが、恐慌があったら大変ですよと言うが、それは単に文字面だけで、国が破綻するというのはどういうことか、中進国、場合によっては先進国に近い、南米のバリと言われたブエノスアイレスで取材をしました。下はボットンという人から、上はラバニャという経済大臣を含め、様々な方に取材をしました。

その中で非常におもしろかったのは、ドサンドスという方と話をした時です。彼は、地域通貨のネットを作り上げました。その地域通貨は、物々交換だけでなくサービスも交換します。例えば、ペットを散歩させる、髪を切る、あるいは経済破綻で病的になった人にセラピストを使うなど。そこでつくづく感じたのは、マーケットという市場(しじょう)と、市場(いちば)という局地的な、対面的な関係が、相互補完的にあれば、社会というものはなんとか持続可能なのだということがわかりました。

経済学的にいう遠隔地交易とかグローバルにIT技術でつないでいくことを、一辺倒である意味モノカルチャー的にやってきたわけですが、それが破綻した。その際に今、何が必要かを一言でいうと「社会を再建する」こと。オバマがやっていることはアメリカ社会を再建するということです。アメリカというのは強欲な金持ちがつくっている社会ではなくて、名もない、自分を通じて社会に貢献する人がつくり上げている社会であると。これは、一言でいうと、「普通の人が生かされる社会」をつくるということだと思います。私は、これが世界的な流れになっていくと思います。

つまり、マーケットを社会に着床させて、社会が痛めば実は市場も崩壊すると。それではどうやって社会を再建するか。政府という万能の杖にすがることでもできないとなれば、最近流行っていないソーシャルキャピタル、社会関係資本をどうするか。それは、公でもない私的なものでもない中間領域をつなぐということです。ですから、熊本の行政、一般企業、さらにその間をつなぐようなネットワーク、絆、社会関係資本、こういったものを実験的に彼らがやっているのを見て、非常に感銘を受けました。

彼は、『スモール・イズ・ビューティフル』を書いたE・F・シューマッハー(ドイツの経済学者)の影響を受けていました。彼の考えでは、例えば、東京大学や国立大学でやっているプロジェクト型の巨大資金を使ってやっていくもの、これは私は必要だと思いますが、先端的なものは必要で熊大でもやっていかないといけないと思っていますが、もう一方では、生きるための中間技術みたいなものが必要なのではないかと、彼は言っていました。私の雑ばくな予測では、失業者が出て、経済が劣化した場合に、つかみ金を行政や国から恵んでもらうというような発想ではなくて、財政が厳しくても人が生きられるような持続可能な社会をどうやってつくっていくか。その答えの一つが地域通貨であったと思います。

昨日も話をしていたのですが、(国が定額給付金で)2兆円のバラマキをやるくらいなら、これを熊本県内で使えるように一括して移譲してもらって、失業者、医療、環境保全などに、地域を限定して有効期限を切って使うとか、地場で使えばプレミアムがつくなど、お互いが支え合うということが大切だということ、ブエノスアイレスを見て感じました。

2003年当時は、まさか日本や世界がこうなるとは思いませんでした。取材の最後の報告の中では、「これは対岸の火事ではない」というふうくらいにしか言えなかったのですが、今思うとあれは、私にとっては非常にいい経験でした。今後は、そういう観点から地域活性化というものを考えていくべきではないかと思っています。

そして、民間企業も、適正利潤で持続的に長く儲ける、確実に事業活動を行っていくと。なおか

つ、雇用を安定させて、社会を安定させれば、結局それは企業に跳ね返ってくる、そういうルールを考えないといけない。これまで一部の金融機関のように、やらずぶったくりで、会社を辞めても30億、40億の退職金で平気でいれることは、我々から見るとやっぱりおかしいですし、今後企業は、地域社会に貢献し、従業員を食わせて、生産力も上がって、そして適正利潤で儲けていくということが必要なのではないかと個人的には思いました。

#### 【小栗委員】

経済的な視点から現状認識と今後の発展可能性について、ちょっと述べさせていただきます。

熊本を支える産業構造を考えていかなければならないということですが、その背景には、地域社会は人口減少や少子化や高齢化が進み、一方では逼迫する財政問題があります。そうすると今後地域内の循環型経済は縮小せざるを得ない状況になってきたと思っています。熊本県が豊かさを維持し、拡大するには、減少する経済を補うことができる新たな経済構造を構築することが求められているのではないかと思います。これが、知事が言われる「稼げる体質の構築」だと思いますが、幸いなことに熊本には大きな資産があるので、その資産をマーケットイン（市場や顧客のニーズを汲み取って事業活動に反映すること）の視点で加工して、熊本のあるべき姿を描き、その具体策をきちんと、いわゆるPDCAで管理、積み上げていくことが必要だと思います。

熊本県の産業構造の現状を見ますと、肥後銀行が設立した地域のシンクタンクである地域流通経済研究所の算出では、域内循環型産業による産業所得は66%、域外への移外型産業の所得は34%で構成されています。域内型循環型経済は、先程申し上げましたように成熟社会に移行とともに縮小し、域外収支も当県は赤字で推移、これは国でいえば貿易赤字になっている状況ですが、その収支の赤字の穴埋めに国の支援も多くを期待できない状況にありますので、地方経済の充実が求められていると思います。

このような中、経済の活性化を図るには、農林水産業や工業の振興により域外に物を移出することが必要となってきます。また、観光産業の振興や定住圏の確立による域外との交流人口を増やして金を落としていただける地域になる。それからさらにものづくりの基盤をより重厚なものとして、今後期待できる代替エネルギー、省エネとか環境対策、食料自給、また高齢化、医療分野などの産業に先行投資を行うことが必要だと思います。この取組の真意については、熊本県が先般発表されました「くまもとの夢4カ年戦略」の中の「経済上昇くまもと」に示されていますので、申し上げる必要はないのですが、実現に向けてより具体的な実行計画を進めていただきたいと思えます。

それでは、熊本県の資産価値の確認ということで、私なりに考えたことを申し上げます。

まず農林水産業の資産であります。熊本は全国でも有数の農林水産物の生産基地として、その生産物も多岐に亘っています。農業生産額では全国で第7位であります。また水産業では海面養殖の水産物は全国4位にありまして、特に最近は大マグロ養殖なども話題になっています。また海面漁業でも全国上位にある物が多くありまして、全体の生産額では全国12位の位置にあります。従いまして現状でも全国有数の量的な食糧供給基地としての役割を担っています。

この背景には温暖な気候や広い平野や水源豊かな河川、また、確かな技術に裏付けられた生産体制があると思います。しかし、多くの農水産物資源を持ってはいますが、食品加工業とか先程からいろいろ話題になっている観光産業との連携による高付加価値化への対応は今後の課題であります。

また、工業資産につきましては、1960年代後半からの大企業による工場移転や1980年代中頃からのテクノポリス構想、1990年代後半からの先端産業の輸出等によりまして、製造業の振興、また、産業集積の施策が実施され、インフラも整備されてきております。最近では工業振興ビジョンのも

とに、セミコンダクタフォレスト、バイオフォレスト、ものづくりフォレスト構想のもとで熊本の優位性をアピールし、ソーラー産業振興や自動車関連産業の振興にも注力されています。

その結果、先端産業の集積とか輸送用製造業や関連企業が立地しておりまして、アジアの生産基地としては非常に注目されている地域であります。今後の産業集積を図るには有利な状況にあると思います。このような産業集積は、省エネとか代替エネ、また環境対策など次世代対応型のものづくり分野での活用が見込まれる可能性を持っていると思います。このような過程で培ったノウハウを他の産業分野の活性化に応用した取組も望まれるところであります。

また、地理的な面では何回も申し上げられていますが、九州の中心に位置し、九州域内の交通結節点でありますし、熊本には既に先端産業の集積もなされております。また、今般の、九州新幹線全面開業いたしますと、そういう面では九州の地理的中心地としての優位性が一層強まりますし、またこれに九州の横断道路の整備が進めば、アジアのものづくりの拠点としての熊本県の発展可能性が高くなるのではないかと思います。

また、観光面では、熊本県には阿蘇とか天草、自然豊かな五家荘とか清涼な河川、水資源、豊富な温泉など優れた自然遺産や、熊本城など規模、内容ともに武家社会での歴史遺産としては全国有数の資産、また豊富な農水産物がございまして、多様な小ロット生産物の差別化を図るための相互間の連携にはまだ課題があると思います。マーケットインの視点で、熊本で食べてみたい、見てみたい、遊んでみたい、経験してみたいと思わせるような複合的な仕掛けづくりが必要ではないかと思えます。また、九州各地間の連携も活性化して、九州を循環する魅力を高めれば、九州域外、海外からの観光客ももっと誘致することができると思います。その仕組み作りにも多くの課題があると思います。

先程崎元学長がおっしゃられましたが、やはり、一方では教育県として未来を作る人材の育成をもっと強力に進めていって、将来の我国、熊本を背負う人材を輩出していくことが大事ではないかと思えます。

#### 【松島委員】

私からはもう少し具体的な自分の体験談に根ざした具体論ということでお話を申し上げたいと思います。

まず第一は、熊本のマーケティングとかブランディングということであります。これが従来は下手だったという風に言われてきているわけであります。

実は昨年末あるデパートに行きまして、ちょうど地下街に行きますとおせち料理で非常に混雑しておりました。ところが、ある店の周りだけは人がいないんですね。ほとんど空っぽなんです。ふと上を見上げますと、食べ残したものを他に流用して名を傷つけた日本料亭のところだったので。信頼を失うとかくもこういうことになるのかという風に驚きました。

次に、私も「くまもと誘友大使」をやっているものですから、熊本のものはないかなと行って果物売り場に行きました。そうしますとデコポンがあり、熊本だと思って下の表示を見たら、なんと鹿児島産と書いてある。鹿児島産のデコポンという表示ができるようになっているのかわかりませんが、やはり熊本のブランド、熊本のマーケティングということであるならば、そういうことにもっともっと気を遣って頂くといいのかなと思います。

それから農業と観光ということでございまして、まず農業について私の考えを申し上げたいと思います。私は、「農業は6次産業で蘇らせる」という風に思っています。

農業問題については25年前に出た本を読んでもほとんど現在に通用する状態であります。ということは、総論は言い尽くされているということで、今や実行、アクションの時期に来ているのだ

と思います。

東京で農水省の方に会いますと、私の印象では彼ら自身も農政について自信を失ってきているように見えます。実際、世界の食糧危機、あるいは食の安全安心といわれている中で、日本の品質の高い農業については後継者不足、あるいは休耕地・耕作放棄地の問題、耕作放棄地が東京都の面積より多くなっているという背景の中で、供給が足りないという非常に異常な事態になっています。グローバルな視点からみても、このような異常な事態を支える農政というものは、いずれ行き詰まるだろうと農水省の役人の方も考えているのではないかなと、そういう印象を持ちました。農水省は、総論、あるいは形式的には農政の転換をするとは正面からは言わないかもしれませんが、実質的にはかなり柔軟な対応になってきていると思います。

農水省の方が自信をなくしているもう一つの点は、農家のことを盛んに言われるけれども、食糧を消費している消費者のニーズをどれだけ農政に反映させているかというふうに問いかねますと答えがない。これだけ食の安全安心ということが言われていますけれども、今までの農政は作るだけ。その作り方も、一方ではむしろ生産するのを押さえるような、そういう農政をしてきています。私は、今のような農政は、いずれは破綻するのではないかと考えております。

それではどういう形の農業がこれからあるのかというふうに思いますと、私なりに頭を整理しますと、まず、消費者の需要の動向を敏感に捉えるアンテナを張ること。そして生産性を上げること。生産性を上げる具体的な目標としては、輸出を目指すことです。今までの日本の農業は、輸入を防ぐというような意識だったわけですが、これからの農業は、むしろ日本の食品は、もう少しスケールアップ（規模拡大）すれば価格も下がると思います。また、価格が下がる以上に、安全とか品質が断然優れているわけですので、十分輸出していける可能性があると思います。それによって生産性を上げることです。

3番目は、採算がとれるような農業にすること。具体的には、例えば1戸で1千万円位の年収があるような農業をめざすというような具体的な目標のもとで考えていく必要があると思います。どうしたらそれが可能かということを私なりに考えてみますと、6次産業化だと思います。

まず、農産物を作る方が全体を統率するため、この方は兼業ではなく農業に専業する。また、農産物に付随して加工品も作る。これは2次産業。それから流通ですが、全てを自らやらなくてもいいのですが自分でコントロールできるような流通経路を確保する。あるいはインターネットで販売する、あるいは商社などマーケティングの強い業者と共同して行う。全体としては1次産業、2次産業、3次産業ということで物の上流・中流・下流を押さえ、1×2×3ということで6次産業という意味です。このように考えると、付加価値も上がって、生産がとれるようになってくるのではないかと思います。

それでは誰がマネージ（manage：経営、管理）できるのかと考えますと、全国で1万できている農業生産法人というものについて、熊本にどれくらいあるのかわかりませんが、軸となるようなそういう農業生産法人を作り、あるプロジェクト毎に経営者あるいはそこで働く人を全国的に応募してもいいんじゃないかというふうに思います。

その場合に、金融であれば金融の専門、流通であれば流通の専門など、それぞれの専門が対応してやるということが重要だろうと思います。

また、その際、農協とどういうインターフェース（interface：調和、接触）がとれるのかというところがあるかと思いますが、実際にできている農業生産法人を見てみると農協とタイアップしているところがあるわけでありまして。農地の提供あるいは営農指導というようなところでは、農協との補完的な役割分担ということもあるのかもしれません。

いずれにしても、そういうプロジェクトを具体的に作っていく中で、それが実際にできないとい

うことであれば、そこで農水省の方に突き上げていくということをやっていけば、具体的案件が上がってくれば今の農水省にはそれをNOという力はない。ですから地元から新しい農業の形を作っていくということ、具体的にアクションしていくことが重要です。

それから観光です。私も熊本にいた2年間、観光については非常に濃密な生活を送りました。熊本にいるときにスキューバダイビングを始めまして、それから東京に戻りましても年に数回は来ており、熊本の市町村をほとんどくまなく行っていると思います。釣り、イベント、うたせ網からイルカウォッチングなどほとんど全てのところに参加しておりますし、去年は球磨川でラフティングに挑戦しました。こういうことは若い人向けですから「牛若丸」がやることですが、私は「無理若丸」でラフティングに参加しました。(会場笑い)

ということで、熊本の観光に、現実に参加させていただいたわけですが、そういう中で私が一番感じているのは、観光に一番大切なのはハードではなくてソフトであるということです。ソフトが良くないと、また来ようというリピーターにつながらないと思います。その点、熊本の観光については、もっとソフトを考えていただく必要があると思います。

ソフトといってもいろんな分け方があるかと思いますが、一つは地元の方の意識だろうと思います。地元の方が地元のものについて素晴らしいと感じること。この素晴らしさをよその人にも見せてあげたい、楽しみを共有したいというような気持ちにならないと、本当の観光客を受け入れる体制にならない。行政が上から押しつけるような形だけだと、一時的な観光に終わってしまうのではないかと思います。

そういう地域の連帯みたいなものが必要になると思いますが、その場合、ある種の自主規制が必要になってくるでしょうから、そこに住んでいる方が規制とかルールに従っても町全体がwin(うまくいくこと)になるならば自分たちもwinになるという考え方で、一つのプロジェクトを担っていくというような気持ちが一番大切だと思います。

それからもう一つは、皆様がずっと言われてきたことですが、市町村とか観光地とか狭いところで観光を考えないで、他の町、他の県、あるいは国境を越えて、大きな面で観光を捉えることが必要だと思います。知事が考えておられる回廊とか遊歩道というのは広域的な捉え方となっているのかと思いますが、トータルなデザインが必要かと思います。

最後は、観光の対応が変わってきているので、観光地に(観光客を)運び、食事をしてもらい、バスで送り出すということではなく、そこに来てもらってどう過ごすか、ということが重要だと思います。例えば、四国の遍路は、お寺巡りもすごいのですが、遍路の通り道沿いの民家の方が接待としてお茶菓子でもてなすということがあります。ですから、例えばタウンウォッチングのガイドやインストラクターという面も必要だろうと思います。

それと、私が是非お勧めしたいのは遊歩道です。これはイギリスでは「フットパス」といっておりますけれども、まさに自然の中を歩き回る。それから、歩くだけでなく自転車で回るということで、バイクレーンを作る。バイクなどは、これからどういう風に観光に入っていくか分かりませんが、「ツール・ド・阿蘇」など、瀬の本高原のような広いところがあるわけがありますから、そういうイベントも考えられる。また、日本ではあまり一般的になっていませんけど、キャンピングカーということも広い阿蘇では十分将来性があると思います。

観光はハードも大切だけれども、ソフトを是非、併せてよく考えていただく、それが観光業を伸ばす大きなポイントになると思います。

#### 【崎元委員】

少し関連づけてお話ししたいと思います。

マーケティング、ブランディングの話がありましたけれども、ひとつ熊本が非常に失敗していて、これをうまくやればという例をお話しします。

熊本大学沿岸環境科学教育研究センターという機関があります。有明海・八代海の環境保全、或いは干潟浅海域の底生生物の多様性等を研究しているのですが、その中で有用二枚貝、タイラギ、ハマグリ、マガキというのがあります。牡蠣、オイスターといいますが私は20年くらい前にシアトルのシーフードレストランで牡蠣を注文したところ、そこには“KUMAMOTO”と書いてありました。熊本から牡蠣がブランドとして渡っているという歴史があるのです。

そういう中でタイラギというのは、牡蠣のように垂下、垂れ下げて養殖するという実用化の研究がかなり有望です。また、申し上げたいのはハマグリです。本学の速見先生達の研究によりますと、熊本が生産量日本一だというのは皆さんあまりご存じないんですね。ハマグリは日本一なのです。ところが3センチになれば採ってしまい、市場に出してしまうのですが、実はその熊本の稚貝（幼い貝）を台湾に持って行っているんです。そして台湾で増やして東京湾に撒き、そこで5センチぐらいに（大きく）して“江戸前ハマグリ”というブランド化がされている状況があります。これは絶対に熊本ブランドとしてやり返さないといけないなと考えます。

これは漁協などいろんな問題があって、採れるだけ採る漁業ではなく、やはり基礎的な研究を生かした管理型の漁業に転換していくということで、ここに漁協の方もおられるかもしれませんが、やはり県等でリーダーシップを発揮されて、ブランド化するというのも可能ではないかという一つの例として挙げさせていただきます。

それからもう一つ、いろんな観点で今までも出てきたかもしれませんが、環境、あるいはサステナブルの視点を持つべきであると思います。“環境都市みなまた”という形の再生が図られているということをご紹介します。水俣病の問題もありますが、現在、水俣市は、森副市長をはじめ、環境モデル都市をめざして“水俣エコタウン構想”や“エコポリス水俣構想”などを推進しておられます。熊本大学も水俣市と共同申請して、ある補助金を利用して、“水俣環境マイスター養成プログラム”を実施しております。3月には第1期生23名のうち18名が卒業されます。我々が水俣に出向いてそういう講義をしたり、実習をしたりして、基本的には水俣から世界に環境保全の大切さを発信できる環境保全の担い手、環境マイスターを養成するというので、水俣市民の皆様を対象にして、環境リサイクル教育、地域マネジメント教育、あるいは個別の課題対応型研究インターンシップなどを通して、水俣地域の再生に不可欠な資源循環型社会の構築に貢献できる人材、さらには“エコポリス水俣”を世界に情報発信できる人材を養成することとしています。

ご存じの通り、日本は環境先進国と言われます。水俣でやっていることは、例えば、太陽や風力などの自然エネルギーの導入、バイオマスエネルギーの創出、廃棄家電（廃棄された家電）からレアメタルを回収する、あるいは安全安心な農林水産物、海藻の森、エコハウス集落など、多様な持続可能な地域づくりを行って、水俣市は2050年までに温室効果ガスの排出量の半減をめざすという宣言をされています。

こういう水俣市の活動を、当然県からも支援していただいておりますけれども、先ほどからの新しい産業の創成というような形で広がりがある取組ですので、それをすべての県域に広げることができるだけ考えていただいて、熊本を環境先進県と呼ばれるような環境型の新規産業創出にも長けた施策を考えていただけるといいのではないかと考えております。

#### 【齊藤委員】

もう皆さん、同じような結論になっているのだと思いますけれども。

熊本を離れて随分長くなりますが、熊本の農産物や天草の魚が美味しいということは東京の人が

らも聞いたりします。天草の魚とか東シナ海の荒海でとれた魚は非常に美味しいんですね。日本海もそうですが。

それで、なんとか熊本県や市町村の産業にならないかなと考えますと、注文をしたり、配達したりするシステムが出来ていないという感じがするのです。例えば、近頃流行らないかもしれませんが、お歳暮やお中元を贈ろうとするときに、天草のあの魚を送ってあげたいけど、どこに注文したらいいのかなと。やっと見つけ出して注文したんだけど、送金と配達バラバラになっていて、お金はとっくに送ったんだけど、なかなかお客さんに物が届かない。電話して聞いたら「お金が入っていません」と言われたり。既存の素晴らしいものがあるのに、販売戦略、商業のやり方によって、様変わりするのです。

よそのことをあまり言うてはいけないのですが、今のこの不況の中で記録的に利益を出している会社が上場会社でもたくさんあるんです。例えばローソンという会社がありますね。ローソンは爆発的な利益を出しております。新浪（社長）さんとよく話すのですが、彼が何をやったかというところ、以前、ローソンは何でも4人前ずつ包んでいたのです。ソバやバナナを4人前ずつ包んで売ってました。彼は考えました。周りはおじいちゃん、おばあちゃんばかり。また、東京はシングル、独身の女性や男性が多い。4人前だと実にもったいないから買わないということに気がついて、バナナを2本ずつに外してビニールに包んだら爆発的に売れたんです。それから、ソバ4人前の時は誰も買わずに残って捨てており、日本はすごくもったいないことをしていたのですが。彼は、それを2人前ずつに分けたのです。すると、しばしば完売するそうです。

一事が万事なのですが、衣料でいうと皆さんご存じのユニクロ。デパートが前年比10%以上の減益なのに、ユニクロは始業以来の利益を出しております。常に社長や社員が「お客さんは何を求めているのか」と気配りをしてるのです。かゆいところに手が届くことさえやればいいのです。

現在、天草や熊本の産物の中で、東京で非常に評判がいいのが塩トマトですが、塩トマトは1月末から2月のわずかな期間しかないのです。注文すると「もうありません」と言われるのですが。塩トマトは高知県もつくっているのですが、「熊本の塩トマトはすばらしい」と銀座の料亭の女将さん達が言っています。こうした、ちょっとしたことで産業につくりあげられる。これは、組織だったところ、例えば県でもいいと思うのですが、生産だけではなく、ディストリビューション（distribution：流通）する、販売する商業として構築する必要があるのだと思います。

それから、ばかげたことを一つ申し上げますと、熊本で何が有名かということ、女子ゴルフの強い人は、みな熊本出身だと。差し障りがあるかも知れませんが、清元さんと坂田さんのおかげかと思っているのですが。そこで、坂田さんと清元さんと韓国とで熊本に大ゴルフ学校訓練所を作って、世界のゴルフ選手をここでつくるというような構想はどうかと。これはばかげているのですが、実はNHKのテレビでご覧になったでしょうか。テニスの選手は世界の優秀な能力のある選手を集めて、例えば日本からは錦織選手が行っているのですが、すばらしい環境であれだけの選手を作り上げていくのです。それは、大産業として成り立っているのです。韓国の方にとって、熊本は近い。宮崎のシーガイアとか宮崎のバス会社を再生したときには、韓国の人を宮崎へどう呼ぶかということ必死に考えて、シーガイアなどではエステツアーなどをつくったら、シーガイアは黒字になってきています。新しく大きな企画も大事だと思いますが、マーケットは何を求めているのかということを見つけて、それにきちっとフィットするような政策を打たれると、コロンブスの卵ではありませんが、意外と目の前に産業のソースがあるという感じがいたします。

#### 【橋田委員】

先程申し上げたことを少し具体的に2点、お話させてください。

1点目は、九州新幹線鹿児島ルートが全線開業すると、福岡 - 玉名が15分、福岡 - 熊本は30分以内となります。玉名には温泉もあるし、可能であれば、玉名近郊の土地を比較的安く福岡の人に売って、そこに住んでもらい、住民税をとるといようなことを考えてみてはいかがでしょうか。税制上できるかどうかわかりませんが、県内におられる方と他県からの居住者を差別するわけにはいかないかもしれませんが、新幹線開業で（福岡 - 熊本間は）通勤圏、あるいは簡単に行き来できる時間的距離になりますので、それをうまく使う方法はないかと思います。

例えば、福岡のホテルが足りない時が結構あるのですが、福岡でコンベンションやイベント、様々な会議がある時に、玉名あたりの旅館に泊まって福岡の会議にも参加できるのではないかと思います。代替というよりもむしろ、温泉があるということアピールすると、関東方面や海外から来る人達が福岡で会議をするときに、福岡に泊まらなくても玉名に泊まった方が楽しく過ごせると。そういう工夫もあるのではないかと思います。

2点目は、九州観光推進機構がつくられ、「九州はひとつ」ということで色々な活動をやっているのですが、特に南九州3県の点在する観光を線でつなぐという広域観光ルートができないのかなと考えております。従来は、自分の県の観光図があっても隣の県は真っ白という地図が多かったのですが、九州観光推進機構ができたおかげで、最近は隣の県までつながっているようです。外国人の方からすれば、熊本県まで来てあとは何も書いていないということになると、その後どこに行けばいいのかわからないということになりますので、もう実施されてあるのかもしれませんが、南九州3県の広域観光ルートの点を線でつなぐという取組みがぜひ欲しいと思います。

最後ですが、先程、幼老共生のまちづくりだとか農業振興ということを書きましたが、産学官連携の中で、「学」にどのようなことを協力していただきたいかと申しますと、品種改良とか社会システムづくりの知恵を出していただくということです。「官」もそうなのですが、1つのことではなくて、農産物を複合的にかみ合わせるとか、観光をかみ合わせるとか、あるいは人材育成とか、そういうものを複合的に行える、比較的広い場所で、そうした社会システムをつくることはできないのかなと考えます。自給自足的なことをやりながら、かつ、一次産業である程度の利益を出して、そこで上がった利益を還元しながら若者の教育をするとか。あるいは、不況で職を失った人達がたくさんいますので、雇用創出と人生の勉強の機会提供の支援をするために、ニートのような人達に来てもらって、その場所で酪農をしてもらおう。若者を心身ともに鍛える、農業に従事する尊さを徹底的に教え込むという仕組み作りができないかなと。

最初に言いましたように、高齢者がある程度癒しの気持ちを味わいながら、人の役に立っているということを体感出来るような仕組み、そうしたものを経営的にも成り立つような、一つの社会システムを、産学官協働のもとで熊本の地につくることが可能ではないかと思います。そしてそれは、非常に価値のあることだと思うし、経営的にも十分成り立つことではないかと思います。

#### 【蒲島知事】

議論は尽きないようですけれども、今知事として皆さんのご意見を聞いて感じているのは、色々な可能性は昔から言われており、熊本には可能性があるということも昔から言われているのですが、ただそれが実際の行動まで到達していない、そこがたぶん大きな問題であろうと思います。

そこに行政の役割があります。今、様々な可能性、問題点、具体案をいただきましたので、これを踏まえて、越えていけないのは何だろうかということを知事として考えたいと思います。

また、時間を切らないとなかなか政策というものはできませんので、時間を切ることがまず大きな決断だし、時間を切った結果を示すことも決断だと思います。私の乏しい知事経験から考えますと、1つの決断には大きな問題が生じます。しかし、そこを決断していかないと、熊本の

きな可能性が爆発してしまうのかなというふうに考えます。

【松島委員】

\*会場からの質問(農業に従事されている方から、農業経営が厳しく、農地の売買と借金の問題から農業を辞めたくても辞めることができない現実があるという内容)に対する応答として農業に従事されている方のご意見ということで傾聴いたしました。

今おっしゃるように、農業は暗い部分もございますが、明るい部分としては、農業に従事されている方の中にも色々な想いがあり、中には農業でやっていこうという人もいるということです。そうした人をいかにしてサポートしていくかということに、行政の方が力を入れていただければ、本当に生産性の上がるような農業になっていく可能性があるのではないかと思います。

それから、農地の問題ですが、農耕に一番適しているような平坦な部分はむしろ転用が進み、生産性の上げにくい農地だけが残ってしまう、というような農地の転換の実際のあり方がかなり歪んできており、そのことが、これから農地の問題をどうするかということ複雑にしているかと思えますので、指摘しておきたいと思えます。

【蒲島知事】

ありがとうございました。

会場の皆さんからも、とても的確な質問、コメントをいただきました。今日はたくさんの方が傍聴においでになり、そして素晴らしい方々が委員としていらっしゃいましたので、このような時間を設けることができました。

時間が参りました。

長時間にわたって御議論いただき、誠にありがとうございました。県政にとって、そして私自身にとっても大変貴重な、有意義な時間でした。いただいたご意見につきましては、十分参考にさせていただきます。

また、議事録は、後日、県のホームページに掲載させていただきたいと思えます。

本日はありがとうございました。